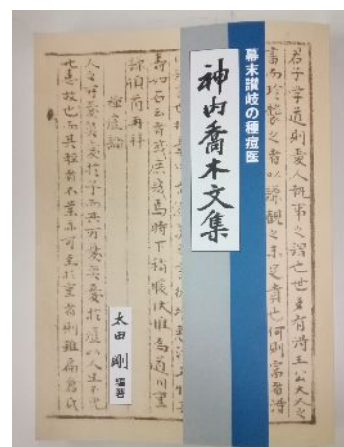


2021年7月 発行
人権・同和教育グループ

神内喬木（きょうぼく）は三木町出身の漢方医で、幕末の讃岐で種痘を普及した名医の一人です。当時、天然痘は難病とされていました。漢方の治療では限界があると悟った喬木が、緒方洪庵由来の種痘を始めたのは1850（嘉永3）年。しかし、西洋医学の種痘は円滑に浸透したわけではありません。「四つ足の動物の膿を植えると角が生える」といった噂に接種をためらう住民や、その効果に疑念を抱く医師に対し、喬木は誠心誠意、説得にあたりました。

新聞紙上で、遺稿集『幕末讃岐の種痘医 神内喬木文集』のことを知ったのは、高齢者への新型コロナワクチン優先接種がはじまった4月12日でした。さっそく編著者の太田剛さん（四国大学文学部教授）に連絡を差し上げたところ、本校に寄贈していただけることになりました。生徒のみなさん、ぜひ図書室で手にとって地元の先人に思いを馳せてください。

喬木は『種痘論』の中で、「人が心配するもののうち天然痘以上のものはない。人が生きる限り、その病気からは逃げられない」と述べています。これは新型コロナウイルス感染症にも当てはまります。先月から集団接種がスタートしたことで、「集団免疫」獲得への期待が高まっていますが、一方では、病気など様々な理由により接種できない方々もいらっしゃいます。接種していない方に対する接種の強制や差別が行われないことを切に願います。



太田先生ありがとうございました

【人権・同和教育ホームルームの様子をお知らせします】

全日制

1年次生 「人権クロスロード」

私たちの日常はクロスロード（分岐点）の連続です。その時々を選択は、人権に配慮したものになっているでしょうか。今年度のホームルームでは、毎日の生活で二者択一を迫られる場面を例題として設定し、適切な行動を一人ひとりが選択することで、人権に配慮した態度がどのようなものなのか考えました。

また、グループ活動を通して様々な意見に触れることで他者を理解したり、自分の意見を受け容れてもらうことで自己受容感を高められました。



生徒の感想：同じ解答をしていても理由が様々で聞いていて楽しかった。自分とは違う考えを持っている人の意見を聞くことは、自分の考えの偏りを直してくれるのではないかなと思った。／今回感じたことは、自分はいつも多数派だろうと思っていたけれど少数派になることもあるということだ。自分がたとえ少数派だったとしても意見を言うことは大切だということも分かった。／すぐに判断するのが難しい問題ばかりだったので、質問について深く考えることができた。見方を少し変えただけで考え方がガラリと変わることも分かった。

保護者からのご意見：家族で話し合ったらみんな同じ意見になり、今までの育った環境が答えに繋がっているように感じました。クラスの皆、それぞれが違う価値観で生活しているので、「みんな違ってみんな良い」こと、いろいろな意見があって当然なので、自分の意見を誤解を与えないようにはっきりと伝えることが大切だなと、改めて思いました。

2年次生 「新型コロナウイルス感染症と差別」

昨年度のホームルームでは、感染拡大防止のために最前線の現場に立つ医療従事者とその家族、また、スーパーマーケットの従業員や配達ドライバーなど、社会生活の維持に不可欠な仕事についている「エッセンシャル・ワーカー」への理解と配慮の必要性について考えました。

今年度はそれらに加えて、より身近な、すなわち家族やクラスメイトが感染、または濃厚接触者に特定されたときに、どのような対応をとるべきかについても考えました。



生徒の感想：これまで、差別や偏見について、「してはいけない」ということしか学んでこなかったような気がする。今回のホームルームで差別や偏見のメカニズムについて詳しく学べてよかった。／コロナが収束するのはいつになるのか誰にも分からないけれど、未来に楽しみをとっておくと考えようにしたい。恐怖はあってもいつも通り笑ったりして、毎日楽しく充実したものにしたい。

保護者からのご意見：エッセンシャルワーカーに当たる仕事です。実際にストレスを発散するための電話を受けたこともあり、大人でも自分の感情をコントロールすることができないものかと驚きました。／医療従事者です。授業でこのような内容について話し合い、考える機会を子どもたちに与えてくださり、ありがとうございました。

3 年次生 「差別選考をなくすための取り組み」

就職は、人が社会とつながる最も重要な窓口です。その選考に、意欲や能力・適性以外の基準があってはなりません。しかし、長い間の慣習として、受験者本人に何ら責任のない事柄で差別選考が行われ、その解決に先人は努力してきました。

今回のHRでは、かつての差別選考と現在の取り組みとを学習し、公正な採用選考とは何かを考え、自分たちがどうすべきかを話し合いました。そして、一人ひとりの行動が、就職差別解消の力となることを理解することができました。



生徒の感想：これから入試等で面接がある。自分をよく見てもらいたいために、答える必要のない質問にも答えてしまいそうだが、断る勇気を持ちたい。／最初は特に問題を感じなかった質問なのに意見交換をした後でハッとすることがあった。普段の何気ない会話の中で、差別にあたることや、相手をいやな気持ちにさせるようなことを言わないように注意したい。／同和問題を広めると、かえって問題を悪化させてしまうという考えもある。しかしそれでは、さらに部落への偏見が広まると私は思う。身近な人にも同和地区の方がいて、隠されるよりはみんなに知ってもらいたいと言っていた。一人ひとりが同和問題を正しく理解して、正しく思いやるという気持ちが大切だ。

定時制

1 年次生 『差別とは何か「コロナ禍とハンセン病」』

新型コロナウイルスの感染拡大により、日本社会に新しい差別が生まれました。また、外国にルーツを持つスポーツ選手に向けられた差別発言などについても考察しました。

隔離や排除につながる忌避意識を学ぶ教材として、ハンセン病患者への過去の誤った政策を取り上げました。安心・安全が当たり前のように信じられている社会でも、コロナ禍のような状況になると差別や排除が起こります。ハンセン病患者が受けた非人道的な扱いが繰り返されることがないように、生徒相互の人権意識を高める学習をしました。今後のホームルームにつなげていきたいと思います。

2 年次生 『同和問題①（部落の歴史 中世～江戸時代）』

DVD「部落の歴史 差別の源流を探る」を視聴し、教員の説明を聞いてワークシートを完成させる活動を中心に学習しました。A. 部落史のとらえ方の変化、B. 部落史の起源とその変化、C. 身分の流動性と宗門改め制度による固定化、D. 被差別身分の人々の役目と生業、E. 身分統制の強化と抵抗、の5つのテーマに沿って学びました。

次回は「水平社宣言」を中心に、明治時代から現代までを学習する予定です。部落の歴史を学ぶことにより、自分自身の意識と向き合い、差別をなくすための行動を考えてほしいと思っています。

3・4 年次生 『就職差別から学ぶ』

採用選考で差別をさせない取り組みについて学びました。就職試験の際に履歴書の提出と面接は必須です。履歴書については、全国高等学校統一応募用紙（統一応募用紙）を採用していること、面接では、差別につながるおそれのある12項目の内容、違反質問があった場合の答え方や学校への報告、その後の受験先の企業と生徒へのフォローについて説明しました。

最後に、受験企業によっては、性別の任意記載、写真を添付しない、名前も苗字だけでよいとするなど、履歴書に関する最近の動きや、男女雇用機会均等法の成立とその意義について考えました。



